慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アンコール・ワットにのこされた森本一房の墨書について
Sub Title	Japanese inscriptions at Angkor Vat, written by Kazufusa Morimoto
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1972
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.44, No.3 (1972. 4) ,p.79(323)- 89(333)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19720400-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アンコール・ワットにのこされた森本一房の墨書について

清水潤三

一

一九五八年の正月と二月の両度にわたり、筆者は日本民族学協会の「東南アジア稲作民族文化綜合調査団」の一員としてカンボジャに滞在しつつ、アンコール周辺の古代クメール文化の遺跡を調査する好運に恵まれた。とくにアンコール・ワットの石柱に十数例の日本人による墨書が残されている事実については、出発前から興味をひかれていたので、松本信広教授と共に出来うるかぎり詳細に検討を行い、従来知られていなかつた新発見の一例を追加することを得るとともに、幾つかについて新らしい判読を試みることができた。その成果については調査団の報告書「インドシナ研究」（一九六五年）に公表した通りであるが、アンコールを離れる時から前稿を草する際に及んでも、筆者の心に蔭として残るものがあつた。それはアンコール・ワットの第一回廊内部の西北隅にある一小建築物―西南隅の相対する位置にある同大同形の建物と共に経蔵かとされている―にも、筆者がA号として報告した墨書の筆者である森本右近太夫一房の残した墨跡があるらしいことを知りながら、実査していないという事実であつた。とくに、いわゆるロルオスグループと呼ばれるロレイ、プラコー、バコンの実査に手間取り、さらにアンコール・ワットへ戻る時間を失つた時の心境は十余年を経た今日でも忘

れ得ぬものがある。

ところが幸いにも、その後われわれ史学科の新進である近森正君がカンボジャに三年間滞在して研究を行う機会を得、この待望の墨書を実見、撮影して帰国したことが知られたので、前稿の追補を行うべく心に定めていたところ、今回浅子勝二郎教授を記念する特輯号の編集が行われ、古代建築に造詣の深い先生とは強がち無縁とも思われぬところから、本稿の筆をとることにした次第である。前置きが長くなったが、筆者には忘れ得ぬ縁（えにし）とも思われるので、敢て経緯を書き止めておきたい。また前稿同様、剝落がはげしくきわめて読みにくいこの墨書の解読に当つては中井信彦教授の御協力を煩わし、高橋正彦氏にも示教を受けた。予め記して感謝の意を表する。

二

さて、森本右近太夫一房という者が書きのこした墨書のうち、われわれが「A号」としたのは、アンコール・ワットの正面、すなわち西側の外郭を形成して南北に走る第一回廊と、その奥にある第二回廊をつなぐ三本の短かい東西廊の中央を南北に貫く短廊の南部に立つ石柱の一つに南面して残っている。この墨書については古くから黒板勝美、岩生成一両博士による判読と研究が著名であるが、われわれの実査と中井教授の写真判読の結果により、次のように読むべきことが知られたのである。

寛永九年正月ニ初而此所来ル生国日本
肥州之住人藤原之朝臣森本右近太夫
一房□御堂ヲ心□（カ）為千里之海上ヲ渡一念
之儀ヲ念シ生々世々娑婆寿世之思ヲ清ル者也

為其ニ仏ヲ四骸立奉ル物也
摂州北西池田之住人森本儀太夫
右実名一吉善魂道仙士為娑婆ニ
是ヲ書物也
尾州之国名谷之都後室其
老母者(カ)□明信大姉為後世ニ是
書物也
寛永九年正月廿日

いま古い報告と比較して問題点（・印を付してある）をとり上げて見ると、(1)第三行目の第三字は闕字と見るのが適当であろうこと、(2)同じく三行目の〝心〟の下は黒板博士が〝ニ〟とされているが空間が大きすぎ、文章もそれでは通じがたいので□とする。(3)四行目〝之儀ヲ念〟の次にはシが存したらしく、その下方の〝清ル者也〟のルと共に従来見すごされていたものを明らかにした。(5)五行目の〝立奉ル者也〟のルも黒板博士の論文には省かれている。(6)七行目の〝仙士〟は黒板岩生両博士ともに〝土〟とされているが、明らかに〝士〟である。しかし〝士〟に〝土〟の字形があることは中井教授の教示の通りである。(7)10行目の〝老母者□明信大姉〟の8字は保存が不良で確認できかねる。しかし黒板博士が〝老母者明信〟とされているけれども、者の下に不明の一字があることは間違いないと思われるし、岩生博士は〝老母亡魂明信〟とされたけれども、〝亡〟は無理かと思われ、〝魂〟は7行目の同じ字の運筆に似ているけれども、□としておく方がよいのではなかろうか。右に述べた新らしい読み方は、筆者が現地で確認したものもあるが、その大部分が筆者撮影の写真にもとづく中井教授の示教によったもので、再度深甚な謝意を表したい。

次に経蔵に記された墨跡を観察してみよう。これは経蔵入口の石壁に書かれ、石の損傷がA号よりもいちぢるしく、向つて右、すなわち記文の前半がほとんど剝落消滅しているが、概ね次の如く読むことができる。（図版参照）。

肥州之住人藤原之朝臣森本右□□□□
一房御堂ヲ心カケ数千里之海上ヲ渡一念
之儀ヲ念シ生々世々娑婆寿世之思ヲ清ル
者也為其仏ヲ四躰立奉ル物也
寛永九年正月卅日

この読解も中井教授の示教にまつところが大であることを明記すべきであるが、本例の存在によつて前記「A号」の疑問が幾つか解き明かされることに注目せねばならない。すなわち、A号の三行目〝御堂ヲ〟心□とした不明の部分は恐らく〝カケ〟の仮名二字であつたろうこと、黒板博士が省かれており、中井教授と筆者が存在を主張した四行目の〝清ル者也〟とその前の行の「為」（カ）としたものが「数」であることが確認されたとしてよく、従つて黒板博士は省かれているが、中井教授と筆者が存在を主張した四行目の〝清ル者也〟と五行目の〝立奉ル者也〟の二つの〝ル〟の字がこの例において明らかに判読しうるところから、前稿の推定が誤りでなかつたことを裏書している事実を特筆すべきであろう。なお本例第一行目の下方の剝落部が「近太夫」の三字であることは云うまでもあるまい。

さらに付記すべきはA号の日付を黒板博士は〝廿〟と書いたものを〝七〟に改めたように見えるといわれたが、現地についての観察の結果は加筆の跡は見られず、本来〝廿〟であつたと思われ、中井教授も「一」「レ」「ノ」「丶」という筆順によるもので〝廿〟でよかろうとされたのであつた。或いは言わずもがなのことかとも思われるが、黒板博士の研究は〝史学雑誌〟第四十一編第八号に載せられたもので、この号の巻頭には「A号」記文の写真が掲載されており、問題の

「正月七日」は疑問の余地がないほど明瞭に写つている。しかも他の多数の字とは墨色を異にしているのであるが、二十八年後とはいえ、われわれの実見の結果と同時撮影の写真のいずれと比較しても、大きく異つている点が注意されるのである。あだかも今日カンボジャでははげしい内戦が行われており、アンコール・ワットに砲弾が落下したとの報道もあつて、いつこの墨書が湮滅に帰するか心痛にたえないので、あえて実情を記しておきたい。

そこで筆者としては正月二十日を正しいと考えざるをえず、経蔵における新例の方は明白に、〝卅日〟であつて、森本一房はA号を書いた十日後に再びアンコール・ワットに来り、ほとんど同文の墨書を書いたことになるのである。近森君の好意により、その承諾のもとに今後この記文を「N号」と命名することにしたい。筆者はこの問題も含めて「インドネシヤ研究」所収の前稿において幾つかの考察を試みたのであつたが、同書の読者はきわめて範囲が限定されていると思われるので、さらに一房その人について、またこれら記文の書かれた背景等について、筆を進めたいと思う。

三

右に述べたアンコール・ワットの石面に墨書を残した森本右近太夫一房とその父儀太夫一吉については、幸いにもその事跡を窺う資料がある。まず甲子夜話に「清正の臣森本儀太夫の子を宇右衛門と称す。儀太夫浪人の後宇右は吾天祥公の時屢伽に出て咄など聞かれしとなり此人嘗て明国に渡り夫より天竺に往たるに彼国の堺なる流沙河をわたるとき鰕を見たるが、殊に大にして数尺に及びたりと云夫より檀特山に登り祇園精舎をも覧てこの伽籃のさまは自ら図記して携還れり今子孫吾中にあり正しくこれを伝ふ然ども今は模写なり（下略）」とあつて、もと加藤清正の家臣であり、黒板氏によると儀太夫は朝鮮役に参加して奮戦した者であるという。その後この父子は加藤家を去つて浪人し、平戸の松浦公に仕えるにいたつたらしい。甲子夜話は十九世紀前半の藩主松浦静山の随筆であるから信憑性も高く、その子孫が引続き藩中に残つ

ていたのも確実と見てよい。とくに宇右―すなわち右近太夫一房が明国を経て天竺に赴き、祇園精舎に立寄つたと記されているからには、後に触れるようにアンコール・ワットの記文を書いた者がその人にほかならぬことを裏書しているといえよう。しかもきわめて興味をひくのは、一房が墨書を書いた寛永九年（A.D.一六三二年）の五月には肥後熊本の加藤家が幕府の政策の犠牲となつて改易の悲運にあつている。筆者の不敏から森本父子浪人の理由は明らかでないが、浪人の止むなきに至る個人的理由と共に、主家が没落の道を辿りつつある悲境に遭遇し、一房が仏心をそそられたのも偶然とはいえなかろう。一房の墨書は明記していないが、甲子夜話が云うように、一房自身はアンコール・ワットを祇園精舎と考えていたに相違なく、単に彼のみに止まらず当時の日本人はアンコール・ワットをもつて祇園精舎と信じて疑わなかつたのであつた。いうまでもなくこの精舎は仏教における最初の寺院で、仏教徒にとつて特別な信仰対象とされた聖地である。仏道に帰依することの篤かつた一房が、同じくこの道に救いを求めた父母のために仏像四体を建て、祈念の願文を書き残したのも故なきことではない。さらに一房が祇園精舎の図を書いて持ち帰つたという甲子夜話の記述は別な問題を生むのであるが、その前に、当時の日本人の南方における活動と、祇園精舎に関する信仰に眼をむけてみよう。

四

いわゆる戦国時代に日本人が多数東南アジアの各地に渡航したことは今さら喋々するまでもないが、カンボジャについてみると、慶長十二年（一六〇一年）商人助左衛門という者が国王の信任をかちえて、渡航する日本人の取締格に任ぜられたといい、この頃には既にプノンペンとその北方のピニヤ・ルーの二ヵ所に日本人町が形成されていたと思われる。特に後者においては元和四年（一六一六年）日本人の切支丹信者の手によつて教会堂が建てられていた。この頃は御朱印船の渡航が活発であつたから、ここから更にトンレサップ河を遡り、グランラック（大湖）を横切つてアンコール・ワット

に至ることも、決して難事ではなかったにちがいない。（以上は岩生成一博士「南洋日本町の研究」に負う所が多い）。

いま再びアンコール・ワットに残された日本人の墨書を検討してみると、年次を記したものが十例にのぼり、その内訳は

慶長十七年（一六一二年）六例（内七月二例）（別に慶長の二字のみ残るもの一例）寛永九年（一六三二年）三例（内二例は森本一房のもの、他の一例には十月十五日とある。）（他に年次不明三例）となる。それらのうちで森本一房のものは別としても、慶長十七年の七例は肉太で奔放な運筆に特色があり、且つ共通した特徴を示しているから、同時ないしは同一人の手になるものではないかとの疑いがある。森本一房のそれは字も小さく、独自の筆クセが窺われる。またJ号と名づけたものは書き振りも異り、三名の名を記した上妻女にも触れている点で特異であり、最低三人の筆者を考えてよかろう。いま念のため中井氏の判読によるJ号の全文を掲げておく。（・印を付した字は先学のそれと異るものである）

日本肥後国安原屋嘉衛門尉

此所参拝之心□仕候

肥後農□（カ）

同」　内儀

肥前農孫（カ）左衛門尉

同　内儀

すなわち慶長十七年の渡航者、森本一房、J号の筆者ということになる。ただし寛永九年十月十五日の日付をもつB号を一房以外の筆者とするならば、四名の筆者を考えるべきかもしれぬ。いずれにせよ、かなり数多くの人びとがアンコール・ワットを訪れ、記念の墨蹟を残したことは疑問の余地がない。

岩生成一博士の「南洋日本町の研究」によると、森本一房は寛永八年末か九年の初めに到着した松浦家の貿易船に便乗してきたらしいが、彼の目的は単なる交易ではなくてアンコール・ワットに詣でて父母の利益後世を祈願することにあり、深い信仰心のなせる業であつた。〃一房御堂ヲ心カケ数千里之海上ヲ渡一念之儀ヲ念シ〃という墨の跡にはまさしく我々の心を打つものがあり、当初からアンコール・ワットの大伽藍を目指したものであつたことは疑えない。しかし彼はこのヒンズー教の寺院について、いかなる予備知識を持ち、何故に恐るべき執念を燃やしたのであろうか。

五

さて水戸の彰考館に「祇園精舎」と題する一大建築群を表わした平面図が蔵されていることは人のよく知るところで、早く伊東忠太博士が詳細な研究を加えられ、これが疑いもなくアンコール・ワットそのものを写したものであることを詳細に考証されている（建築雑誌三一三号大正元年）。この絵図は筆者も福田耕二郎氏の御厚意で熟覧する機会をえているが、縦六八・四五センチ、横七五センチの紙を用い、建築物は墨であらわされ、堀などの水には青、彫像には黄などの淡彩を部分的にほどこしている。精査してみると実際のアンコール・ワットとはかなり異り、建物が日本寺院の建築様式をもつて画かれていたり、ヒンズー教の神像が仁王像に、獅子が狛犬となつていたりするけれども、全体のプランはかなり正確に現状と一致し、伊東博士の云われたように壁面の浮彫の画題についての説明なども概ね現状に合致するところから、博士の所説は正しいものと云わねばならぬ。またその正確度からみて到底現地を踏まぬ者の聞書きなどとは思われない。従つて戦国時代の末期ないしは徳川幕府の初期において、何者かがアンコール・ワットに渡航して此の絵図を画いて持ち帰つたことは否定しがたいと云えるであろう。此の図は今日立派に表装されているが、その下方に一通の文書が一幅としてあわせ表装されている。この文書は伊東博士が「祇園精舎図の裏書」と呼ばれたものでかなりの長文であるが、こ

の図を理解する上にきわめて重要なもの故、ここに再録しておこう。

大猷院様御代長崎大通辞島野兼了を被為召被仰渡候は中天竺摩伽多国祇園精舎え罷越致見分罷帰可申旨被仰渡候兼了奉畏候御請申上候又被仰渡候は昔より代々の三蔵法師天竺え渡り候へとも渡儀難叶多く相果申候如何其方は可参哉と御尋に付兼了申上候は代々の三蔵法師共不了管に付多相果申候其故は大唐より天竺迄之内幾千万里と申儀難相知或は於道悪獣にとられ或は盗賊に逢ひ多く禍に及申候凡日本道百里余歩行いたし一切人家無御座候依て相果申候兼了罷越候義は阿蘭陀船に乗船仕罷越候はば天竺は不及申あらゆる世界を廻り候ても少も気遣無御座候旨申上候其年阿蘭陀船に乗船仕中天竺へ罷越祇園精舎に至り日本の寸尺を以絵図いたし指上候旨右の序に日本の東海海上三千里先に大国有之候是は日本に可附国と存石碑を建日本国中と印罷帰申候

正徳五年乙未予祖父忠義奉台命在于長崎之日忠義問于其士人某氏者訳士歟名今忘曰嘗聞者大猷院君命大訳士島野兼了者渡于天竺検閲祇園精舎云実否乎答曰実也即示其所模写絵図及書記焉忠義伝写以家蔵是也

安永元年壬辰十一月廿五日　　藤原忠寄

すなわち右がその全文であり、長崎の通辞島野兼了なる者が徳川家光の命によつて天竺に渡り筆写した図を藤原忠義なる者が長崎に赴いた際模写したものであることが知られるのである。また此の絵図には「此君堂蔵本」の印が押されているが、此君堂は水戸の学者で彰考館の総裁を勤めた立原万通称甚五郎、致仕後翠軒と号した人であり、文政六年（一八二三年）に八十才で没している。従つて藤原忠寄がさきの「裏書」を書いた安永元年（一七七二年）には四十三才で活動していたわけであるから文通対面も可能であり、その価値を知つた上で絵図と裏書を筆写させて家蔵し、後に彰考館に伝わることになつたものであろう。

さらに藤原忠義忠寄の両名については伊東忠太博士も三上参次博士を煩わして調べてみたが不明であると嘆ぜられ、筆者もまだその何人であるかを明らかになしえていない。しかし、さきの甲子夜話の述べるところを信ずれば江戸時代初期において、二種のアンコール・ワットの絵図が存したことになり、共に祇園精舎の図と信じられていたことになつて、いささか不自然な気もしてくるのを如何ともしがたい。筆者は前稿において、実際にアンコール・ワットを訪れたのは森本一房であると考え、島野兼了の話は誤伝か或いは為にする作り話ではないかと考えた。伊東博士も古く島野の態度の不遜な点などを挙げて疑惑を投げかけておられる。特に森本一房が詣でた寛永九年の翌寛永十年二月に将軍家光は十七ケ条の海外貿易交通制限令を出して鎖国政策を進めているのであつて、二年後には日本人の海外往復が禁止されたほどであるから、たとえそれ以前にせよ家光自らが島野兼了をオランダ船に便乗させカンボジヤに赴かせたとは思われない。松本信広教授の示教によるとフランスの東洋学者ペリー（Noël Peri）が伊東博士の研究を引用し、家光が建立を計画した仏寺の設計資料とするために彼を遣わしたと述べている由であるが、その典拠は明らかでない。

それに反して森本一房がアンコール・ワットを訪れたことは墨書の存在によつて疑問の余地がなく、甲子夜話の記すところによつて彼がそれを祇園精舎と誤認し、伽藍のさまを自ら図記して携え還つたとあるからには、彰考館蔵の祇園精舎図も一房のそれの転写ではないかと疑われてくるのである。またその図の右下方に「此所ヨリ檀特山エノ道」と記されているのも甲子夜話が彼が「檀特山に登り祇園精舎をも覧て」とあるのに符合するかにも見えてくる。もちろん祇園精舎は唐代の玄奘三蔵の時すでに廃滅に帰していたし（西域記）、一房は全く誤認していたのであるから、檀特山もプノンクーレンなどアンコール周辺の一丘を誤信したにすぎないことはもちろんである。

ただ筆者は戦国末ごろにおいて、わが国に祇園精舎に対する憧憬がいかに根強く残存していたかについて、改めて驚かされたのであり、万里の波濤を越えてカンボジヤの奥地に至つた日本人たちが、ジャングルの中に聳えるアンコール・ワ

ットの威容に接し、これを精舎と誤認したのも無理からぬことと思われてくるのである。単に森本一房ばかりでなく、此の大建築を訪れた人びとが一様にかく信じたからこそ、日本人の墨書が十四例も残されるに至つたのであろう。当時のわれわれの祖先にとつて、アンコール・ワットが祇園精舎以外の何物でもなかつたことを知りうるのはまことに興味深いことと云わねばならない。

終りにこの問題については、なお十分な研究を加える必要があることは云うまでもないが、本稿は「N号」の紹介を主とし、詳細は他日を期したものであることを付記しておく。（一九七一年十一月二十六日）